批評

陳垣氏の『元西域人華化考』を讀む

文學博士　桑原隲藏

陳垣氏は現在の支那史學者中尤も注意に價する學者である。支那にも柯劭忞氏の如き老大家を始め、幾多の史學者があるが、陳垣氏程吾人の注意を惹く學者は見當らぬ。陳垣氏の研究には、二個の特色がある。その一は支那と外國との關係方面を研究の對象にして居ることである。一體支那の學者は外國關係の問題を研究することが不得意である。從つてこの方面に關する支那の學者の著書論文には、殆ど吾人の參考に資すべきものが見當らぬ。所が獨り陳垣氏のこの方面に關する研究の結果、吾人を裨益するもの甚だ多い。氏の處女作ともいふべき「元代也里可溫考」を始め、尋で『國學季刊』に掲載した「火祆教入中國考」「摩尼教入中國考」二篇の如き、何れも資料豐富、考據精確で、當時の學界に重きをなした。今一つは氏の研究方法は科學的である。支那の學者は多く科學的方法を解せぬ。成程清朝時代の學者は、考證學とか實事求是とか表面だけは相當立派な旗幟を標榜して居るが、その內實は非學術的な點が尠くない。資料の批判も不十分で、論理も不徹底で、比較研究

の價値を知らぬ。今日から觀ると、從來の支那の學者の研究方法には種々なる缺陷が多い。新しい思想を所有する支那の少壯學者は、夙にこの缺陷を承認して居る（『國學季刊』第一卷第一號所掲「發刊宣言參看」）。所が陳垣氏の研究方法は、この支那學者の弊竇から超脱して科學的である。

この陳垣氏が昨年末に、『元西域人華化考』を起稿された。稿本の儘で、未だ學界には公表されぬ樣であるが、吾が輩は今春幸に著者からその稿本一部を惠贈された。

この頃少閑を得て全篇を通讀したから、之に關する所感を左に開陳せようと思ふ。この稿本は上下二冊から成る。『元西域人華化考』とは元代の西域人が文化的に支那化した事實を究明したものである。元時代に多數の西域人が支那內地に移住し來たが、その數多き西域人の中には、支那の文化を景仰し、その洗禮を受け、所謂華化した者が尠くない。この事實を研究し明瞭にしたものである。

支那人は夙に所謂楚材晉用主義を實行して、國籍や種族の區別を超越して人材を登庸したから、外國の人材は多く支那に集つた。中にも元時代にこの風が尤も盛を極めた。當時支那に來り仕へた西域人の中には、一方ではその自國の文化を以て元朝に貢獻したものも勿論多いが――例へば亦思馬因等が西域の砲術を傳へたる、札馬魯丁が西域の天文を傳へたる、愛薛が西域の醫藥を傳へしが如き――他方では華化した西域人が、その習得した支那の學藝――經學、詩文、書畫等――を以て太平を潤飾した者も尠くない。陳垣氏の論著は主としてこの後者の場合を研究したもので、之に據つて、當時の西域人が如何に深く、如何に廣く支那文化に影響されたかを十分に知る事が出來る。その內容の大體を了解せしむる爲め、吾が輩はこの論著の目錄を左に開列する。

上册目錄

第一　緒　論
一　西域範圍
二　元時西域文化狀況
三　華化意義
四　西域人華化先導
第二　儒學篇
一　西域人之儒學
二　基督教世家之儒學
三　回々教世家之儒學
四　佛教世家之儒學
五　摩尼教世家之儒學
第三　佛老篇
一　西域人之佛老
二　回々世家由儒入佛
三　基督教世家由儒入道
第四　文學篇
一　西域之中國詩人
二　基督教世家之中國詩人
三　回々教世家之中國詩人
四　西域之中國文家
五　西域之中國曲家

下册目錄

第五　美術篇
一　西域之中國書家
二　西域之中國畫家
三　西域人之中國建築
第六　禮俗篇
一　西域人名氏效華俗
二　西域人喪葬效華俗
三　西域人祠祭效華俗
四　西域人居處效華俗
第七　女學篇
第八　結　論
一　總論元文化
二　元人眼中西域人之漢化

附錄

元西域人漢文著述表

徵引書目

以上の目錄を一瞥しても、著者の論文が、西域人の華化といふ問題を如何に徹底的に研究考覈して居るかゝ判明すると思ふ。その緒論に於て、先づ西域の範圍を限定し、華化の意義を解釋せる如きは、著者の研究の科學的なることを證明するもので、到底從來の支那の學者に見ることの出來ぬ點である。また研究の前提として、元以前に於ける西域人の華化の事實を紹介せる如きも、著者の研究の用意周到なることを證明するものと思ふ。

その本論に於ては元人の文集隨筆等一切の資料を博引傍搜して、所揭の各題目を徵證考覈して殆ど遺憾がない。就中畏吾兒人の高昌僕氏の家傳、及びその一門九進士の事蹟の考證の如き（摩尼教世家之儒家の條）、元末の詩人にして回々教徒たる丁鶴年の事蹟の考證の如き（回々教世家由儒入佛の條）、將た四卷本の『丁鶴年集』の元刻にあらざる考證の如き（回々教世家之中國詩人の條）、尤も委曲を盡くして居る。元代の歷史を研究する者は勿論、廣く支那の文化史を研究する者も、必ずこの論著を參考する必要あると思ふ。吾が輩は此の如き內容豐富で有益な好著が、一日も早く正裝公刊されて、廣く東西の學界に嘉惠されんことを切望して止まぬ。

吾が輩は元時代の事蹟に就いて格別の智識を有たぬ。從つて陳垣氏の論著に對して賞讃は出來ても、責任ある批評を加へ得る資格がない。但吾が輩が本著通讀の際心付いた、二三の不安心に思はるゝ點を左に開列して氏の參考に供せようと思ふ。若し他日この新著公刊の際に、吾が輩の所見をも參酌せらるゝならば幸甚と思ふ。

(一)吾が輩が嘗て紹介した如く、唐の武宗は宰相の李德裕に命じて、秦漢以來中國に仕へた外國人で功績顯著なるもの卅人を選んで、『異域歸忠傳』二卷を作らしめた。(『蒲壽庚の事蹟』二一六頁參看)この書は今日に傳らぬから、その卅人とは果して如何なる人々を指すかは判明せぬが、之に由つても古來外國人の支那に來り仕へた者の尠くないことがわかる。唐以後は一層外國人の入仕が多い。併し此等外國人の多數は軍人武將で、文人は餘り見當らぬ。縱令文人學者があつても、それは大抵所謂北狄東夷種族に限り、西域出身の者は甚だ尠い。陳垣氏はその緒論の西域人華化先導の條に、元以前に華化した西域人として、唐の李彥昇、宋の安世通、蒲壽宬の三人を紹介して居る。李彥昇、蒲壽宬の二人は、先年吾が輩が已に學界に紹介した人物で、たゞ安世通だけが陳垣氏の新紹介である。

陳垣氏は『宋史』卷四百五十九の隱逸傳下に、安世通者本西人とあるを根據として、安世通を西域人と認め、安息出身と斷じて居る。併し『宋史』の西人といふ文句は指す所可なり曖昧である。『宋史』卷二百五十の王彥昇傳に西人とあるのは、原州(甘肅)附近の蕃人で、決して西域人を意味せぬ。宋人は一般に西夏人を指して西人と呼び、彼等を指斥する時は西賊といふた。故に單に『宋史』に西人とあるを根據として、安世通を西域人と速斷することは困難かと思ふ。

假にこの西人を西域人と解釋しても、安世通の姓は安息に本づくもの歟、又は安國に本づくもの歟は可なりの疑問である。唐時代に支那に移住して來た西域人は、多くその本國の名をその儘にその姓にした。唐の中世の杜環の『經行記』に西域の末祿(mouru=merv)國に就いて、

胡姓末者。茲土人也。

と記してある。當時末祿國の人で支那に移住した者が末姓を稱したことがわかる。南宋の鄭樵の『通志』氏族略二（夷狄之國の條）に、

米氏

西域米國胡人也。唐有供奉歌者、米嘉榮。五代米至誠。

とあるのは、米國出身者は支那移住して後ち、米姓を稱した證據である。同樣に西域の石國出身の者は、石姓を稱した。唐の中世に出た李懷光の養子の石演芬の如き（『新唐書』卷百九十三、忠義傳下）、その一例である。

西域に安國がある。その國人の唐時代に、若くばその以前に支那に移住した者は安姓を稱した。唐の林寶の『元和姓纂』卷四に安姓を叙して、

出自安國。……後魏安難陁至孫盤婆羅。代居涼州爲薩寶。生興貴。執李軌送京師。以功拜右武衛大將軍、歸國公。……（其玄孫）抱玉賜姓李氏。兵部尚書平章事、涼國公。

とある。同一の事實が、『新唐書』卷七十五下の宰相世系表（武威李氏の條）に、

武威李氏本安氏。出自姬姓。黃帝生昌意。昌意次子安居于西方。自號安息國。後漢末遣子世高入朝。因居洛陽。……又徙武威。後魏有難陁。孫婆羅周隋間居涼州武威爲薩寶。……至抱玉賜姓李。

と見えて居る。この『新唐書』の記事は餘り信憑することが出來ぬ。安息を黃帝の後などは第一の附會である。武威の安姓を直に安息出身と斷ずることも疑はしい。この安姓は安息よりも安國と關係あるかと思ふ。安國とは中央亞細亞の Bukhara のことで、Bukhara や Samarkand には、唐代まで火祆教が流行して居つた。唐の中世の慧超の『往五天竺國傳』にも、

此六國（―安國、曹國、史國、石國、米國、康國）總事火祆。不識佛法。

とある。マホメット教徒の記錄にも同樣に、西曆八世紀の頃まで Bukhara や Samarkand 一帶の地方は波斯の宗教が流行したことを明記して居る、(Barthold; Zur Geschichte des Christentums in Mittel-Asien 參看)。安息人は火祆教をも摩尼教をも信仰せぬ。凉州の安姓が州の薩寶——この薩寶は『隋書』の薩保と同一であらうと思ふが、『隋書』の薩甫とは音韻上同一と認め難い——を勤むる以上、火祆教の信徒たること明白である。凉州及びその附近一帶の地は、唐時代まで火祆教信徒が多かつた。さればこの安姓を、火祆教と何等の關係なき安息と關係せしむるより、火祆教と關係深き安國と關係せしめて、解釋すべきものと思ふ。この凉州の安姓のことは、支那に於ける火祆教の歷史にとつて、可なり重要なる史料であるに拘らず、從來不注意に看過された。陳垣氏の「火祆教入中國考」にも、石田學士の「支那に於けるゾラトゥーシトラ教に就いて」(大正十二年四月の『史學雜誌』)にも、遂に引用されて居らぬ。

吾が輩は安世通を較ろ安國出身の人かと思ふが姑く陳垣氏に同意して、之を安息出身と認めても安世通の安世を安息の異譯と認める氏の所說には到底贊成し難い。東漢以來西域人に對して、その國名の一字をその儘にその姓とするのが一の慣例となつた。天竺人ならば竺法蘭の如き、月支人(月氏)ならば支謙の如き、康居人ならば康孟祥の如き、安息人ならば安世高の如き、大秦人ならば秦論の如き、皆その實例である。安世高の姓は安で、名は世高である。同樣に安世通も姓は安で、名は世通でなければならぬ。陳垣氏が安世を姓、通を名と認むるのは、間違でなからう歟。

(二)李彥昇、安世通?蒲壽庚三人以外にも、華化の實例とし紹介すべき西域人がないでもない。北朝の乞伏保は高車部の出身であるが、その義母申氏

の死するや官を解き喪を奉じて故宅（洛陽）に歸つた。高車部は所謂北狄で、西域人の範圍外かも知れぬ。されど北朝時代の高車部の土地は、元時代の乃蠻部（或は畏吾兒部の一部）の土地と略相當り乃蠻部（及び畏吾兒部）は元代の色目の一であるから、この場合に限り、高車部人を西域人と同一に取扱つても差支あるまい。親の喪に官を解くことは、支那古來の禮制である。されど北朝時代の多數の官吏は、必しもこの古禮を實行して居らぬ。乞伏保が塞外種族出身で、然も義母の爲に、よく禮制を循奉したのは、その華化の深きを知るべく、『北史』卷八十四に彼を孝行傳に列した所以も茲に在ることゝ想ふ。

(三)乞伏保より遙に適切な西域人華化の實例として、唐代の迦葉志忠を擧げねばならぬ。迦葉志忠はその姓の明示する如く印度人で、唐の中宗時代に右驍騎將軍知太史事（天文臺長）となつた。高宗時代から支那の曆法は、多く印度出身の瞿曇、迦葉、矩摩羅の三家のものゝ手で經營された。迦葉志忠はこの迦葉家の一人と見える。『資治通鑑』の景龍元年（西紀七〇七）の條に、

上以歲旱穀貴。召太府卿紀處訥謀之。明日武三思使知太史事迦葉志忠奏。是夜攝提入太微宮至帝坐。主大臣宴見。納忠於天子。上以爲然。敕稱處訥忠誠。徹於玄象。賜衣一襲。帛六十段。（『唐紀』二十四）。

とある迦葉志忠は卽ちその人である。『全唐文』卷二百七十六に、この志忠が中宗に上つた進桑條歌表一篇を收めてある。誠に堂々たる文章で、是に由つても志忠の華化の深きことを推測するに餘あると思ふ。

(四)蒲壽庚の弟の蒲壽庚の事蹟は、吾が輩が已に學界に發表したが、彼が重資を懸けて定武蘭亭の刻石を買收した事實（『蒲壽庚の事蹟』二八五頁參看）

又彼が海雲樓を建設した事實（同上二三二五頁參看）は、蒲壽庚の華化の一端とも見られぬでない。この海雲樓に就いては、蒲壽宬の『心泉學詩稿』卷四に、

題稱雲樓下一碧萬頃亭

倚欄心自浮。萬項一磨銅。欲畫不得。託言言更窮。陰晴山遠近。日夜水西東。此意知誰會。鷗邊獨釣翁。

といふ一首を收めてある。海雲樓建設の目的は、海舶の出入を望見するに便を圖るにあつても、その樓の結構といひ、その樓下の亭の結構といひ、明に居處の華化した一憑證に供するとが出來る。

この『心泉學詩稿』は『四庫全書總目提要』の存目に掲げらるゝのみで、その書は未だ曾て公刊されなかつた。從つて我が國には舶來して居らぬ。吾が輩は本年の初春に、陳垣氏からその寫本を贈與されて、始めて寓目の機會を得た。同時に南宋の遺民で蒲壽宬の交友たる邱葵の『釣磯詩集』の寫本をも惠贈された。茲に附載して感謝の意を表する。

（五）秦不華は儒者としても、詩人としても、將た書家としても、優に一家を成して、元代に名高き人物である。陳垣氏は彼の事蹟を考覈して殆ど餘蘊がない。但彼を西域人中に加ふべきや否やは疑問である。泰不華は伯牙吾台に屬するから、較ろ蒙古人と認むべく、西域人とは認め難い。陳垣氏はその儒學篇中に、

或稱爲蒙古人。其實伯牙吾台、是色目之一。非蒙古。

と斷定して居るが、如何であらう歟。吾が輩は伯牙吾台は蒙古に屬すべきもので、從つて泰不華を西域人の華化の實例中に加ふべきものでないと思ふ。（大正五年十二月の『滿鮮地理歷史研究報告』第參所收の箭内博士の「元代社會の三階級」四二〇頁 D'Ohsson: Histoire des Mongols. Tome I. p. 426 參看）。（大正十三年八月二十五日）